



圭陵会会長就任のご挨拶

圭陵会 会長 赤坂 俊英

六月の圭陵会代議員会・総会において小川 彰理事長先生および前圭陵会長の齋藤和好先生の御推挙があり、圭陵会の会長の大役を仰せ付かりました医 25 期の赤坂俊英です。

母校岩手医科大学は明治 30 年に私立岩手病院に併設され医学教習所を起源とし、以後、岩手医学校、岩手医学専門学校、岩手医科大学と変遷しながら、多くの医療人を育成し、全国に輩出してきました。昭和 40 年には歯学部が開設され、現在の圭陵会員総数は 1 万人を超えております。さらに、平成 19 年には薬学部を開設、平成 29 年には看護学部が開設され、薬学部、看護学部とも卒業生をすでに輩出しており、近く、これらの学部圭陵会同窓会ができることとなります。すなわち、創立 125 周年を過ぎた岩手医科大学が医療系総合大学として大きく発展・拡大するとともに、その同窓会たる圭陵会も大きな組織となってきました。この輝かしい歴史を有する岩手医科大学同窓会の圭陵会会長に選ばれましたことは誠に光栄に思います。

圭陵会は長年に亘って、岩手医科大学を後援することはむろん、学生教育支援、会員同士の懇親と情報交換、地域の災害医療支援など多大な業績を残してきました。このコロナ禍でも多くの圭陵会員が全国でコロナ感染防御やコロナ患者の治療・検査に尽力しております。しかし、コロナ禍で懇親の場を設けることはもちろんのこと、会議は WEB によるリモート会議ばかりで、会員の皆様には残念な想いを強いておりますが、

これを機に今後の圭陵会の会議の在り方を検討する必要があります。確かに、遠方からわざわざ盛岡まで来られるのも大変です。前述のように薬学部、看護学部同窓会の立ち上げも含め、時代の流れとともに圭陵会は今後も進歩、変革する必要があります。これまでも各学部の学術支援、国家試験成績向上のための学生支援、学生との交流会などは今後も継続すべきと考えております。

令和元年に岩手医科大学附属病院は矢巾新病院に移転が完了し、内丸地区には歯学部附属病院、医学部外来診療部門の内丸メディカルセンターが残っています。内丸地区にあった旧岩手医科大学はおそらく多くの圭陵会員の心のよりどころなはずです。旧 1 号館は残し、そこに岩手医科大学資料館と圭陵会事務室と会議室を設置することを小川 彰理事長にお願いしています。

私の知る限りの歴代の圭陵会長、和田安民先生、小原喜重郎先生、桂 佐元先生、吉田昌男先生、小野繁先生、星 秀逸先生、小川 彰現理事長先生、石川育成先生、齋藤和好前会長の圭陵会に対するリーダーシップとご貢献を見て参りました。先輩圭陵会長の運営方針を継承しながら、時代の変化に即した圭陵会の変革にも取り組む所存ですので、執行部の先生方、全国各支部の会員の皆様のご支援、ご指導の程宜しくお願い申し上げます。



圭陵会会長退任のご挨拶

齋藤和好

私 齋藤和好は、このたび6月30日をもって理事長小川 彰先生のお許しをいただき、圭陵会長を辞任することとなりました。平成28年7月より令和4年6月までの2期6年間皆様のお陰を持ちまして、圭陵会長として努めさせていただきましたこと、御礼を申し上げます。

平成28年6月の圭陵会代議員会の席にて小川理事長先生のご推挙により圭陵会長の大役を仰せ付けられました。会長に選ばれましたことは誠に光栄には存じますが、歴代の会長である星先生、小川先生、石川先生の後任として十分な職責を果たせるか、極めて不安な気持ちであり、ただただ新執行部、全国各支部の先生方のご支援・ご指導をいただき、母校のために全力をあげて取組むことを胸に、会長職務が開始されました。

初めは、私自身会長になったばかりで、各支部の様子を知りたい、また知らなければならないと思い、各支部にお声掛けをお願いしましたところ、会長に就任した平成28年からコロナ蔓延前の令和元年半ばまでの3年半において25回余支部にお伺いすることができました。支部にお伺いをし、その懇親の中でいただきました圭陵会そして大学への要望・期待、また暖かいご支援・励まし、その支えのもとに十分な結果が得られたかは確たる自信はありませんが、会長として我が圭陵会ひいては母校の発展にいくらかでも繋げることができたと思っており、感謝を申し上げます。

振り返りますに、この6年間はまさに大学にとって、また圭陵会としての同窓会にとって大きな飛躍・発展の時期であり、一方で困難を極めた大変な時期であったと思います。

会長となった翌年の平成29年4月は、母校が創立120周年を迎える大切な時でした。岩手医大あつての同窓会、同窓会あつての岩手医大であり、この記念祭をお互いの力により立派に挙行し、大学・圭陵会が更に将来に向かって大きく前進するためには、圭陵会全員による協力が何よりも重要であるということから、私は圭陵会長として今こそ校歌と愛校心を胸に、大学の発展向上を目指して頑張る時であるとして、会員の皆様の物心両面にわたる絶大なご理解とご支援をお願い申し上げましたところ、会員の皆様が一丸となって

お答え頂いたと確信をいたしており、あらためまして深謝いたします。

そして、皆様ご存じのとおり、平成29年4月20日に岩手医科大学創立120周年記念式典が盛大に行われ、その記念式典において小川理事長は120周年を機に創立者三田俊次郎先生始め先人達が築いた建学の精神の理想を胸において、なお一層努力して、将来の発展に向かって輝かしい歴史をつくる、というすばらしい式辞を私達に与えて下さいました。式典の最後には岩手医科大学管弦楽団の生演奏のもと校歌を皆で斉唱し、すばらしい余韻を残して終わったことが今でも思い出されます。

また、母校は同年4月には医・歯・薬学部看護学部を加えて、名実ともに4学部を有する医療総合大学となり、さらに令和元年9月には大学そして会員の念願であった矢巾キャンパスへの新附属病院の移転開業、併せて内丸メディカルセンターの運営を開始、岩手医科大学の新たな大きな飛躍・発展が始まっております。

しかしながら、その後その行く手に現れた令和元年後半からの新型コロナウイルス感染拡大という難局、その前触れもない出現は3年を経た現在でも、私達の同窓会活動、生活、大学の運営、医療に大きな苦しみを与えております。一日も早く、会員一同手を携えてその試練を乗り越え、以前の暮らし、状況に戻れること。併せて、内丸再開発を含めた内丸メディカルセンターの新改築が早期に実現されることを祈っている令和4年6月今日この頃です。

最後に、岩手医専第1期生が昭和7年3月に、心のふるさと、学校の向上発展、財政を強固にする、の3点を目標に大同団結し、「圭陵会」という同窓会の発足と同窓会名が決定したという感動的な歴史を読むと、岩手医大の向上発展の源は、上記3点に集約されそうです。

私達も昔の大先輩の「圭陵会」発足の御苦勞を偲び、愛校心を胸に「医療人たる前に、誠の人間たるべく」大学の向上発展を目指し頑張らしましょう。

準会員である学生諸君は、特に入学時の大志を卒業時までしっかりと維持させ、完成させる努力をすることを第一目標に努力して欲しいと願っております。